

平成31(令和元)年度 特定非営利活動法人やまがた育児サークルランド事業報告

平成31(令和元)年度事業について、定款の項目に従い成果を総括すると次のようである。

① 育児サークルや育児支援サークルの支援とネットワーク化事業(定款第5条(1))

これまで主に支援対象としてきた「親子遊び」や「交流」が中心の自主運営育児サークル数は、年々減少傾向である。平成25年度22、26年度17、27年度13、28年度14、29年度12、30年度10、31年度は8サークルとなった。あ～べの移転を契機に、問い合わせ対応、見学希望者の取次、運営相談などサークル支援機能をべにっこひろばに移管して3年目となり、べにっこひろばの地域支援活動として行った。育児サークルのつどい・サークル交流研修会はあわせて6回開催し、223名が参加した(11月開催のつどいは令和元年度村山地域育児サークル交流会実施業務)。平成30年度から取り組んだ「今日はべにっこひろばの日」は、5サークルがのべ6回151名参加と倍増し、活動場所と活動プログラムを支援することができた。平成27年から活動する「プレイセンターべにっこ」は、母親同士の関係が深まり、新メンバーが加わっても母親中心の運営が継続できるようになった。(べにっこひろば及び山形市べにっこひろば子育て支援センター管理運営業務、以下べにっこひろばと表記)。

サークルの中心的な機能「親同士のつながり」を作る「赤ちゃんと一緒(BPプログラム、全4回)」は、平成27年度から通年開催し2～5か月児の母子の仲間づくりをしてきた。31年度はあ～べでは10期計画し8期開催したが、3月の途中で新型コロナウイルス感染症拡大防止のため子育て支援施設が閉鎖となり中断した(子育て支援施設子育てランド運営業務)。子育てでつながる家いろはでは3期計画し2期開催した(子育てでつながる家いろは(長井市子育て支援センター)運営業務委託、以下いろはと表記)。

育児支援サークルの支援では、べにっこひろばで、大学生ボランティアが不定期に活動イベント等で活躍した。地域では、山形市大曾根コミュニティセンターにて乳幼児対象の運動会を連携して行った。

育児中の親同士が子育てを助け合う育児サークルは減っているが、育児中の親が共通のテーマのもとに集まるサークルや趣味のサークルとの関わりが増加した。働くママのサークルWignal、布絵本サークル「虹の会」などである。また、保育士資格取得準備サークルは保育士試験に向けて19回開催、のべ30名が参加し2名が合格した(子育て支援施設子育てランド運営業務)。「子ども食堂」の活動ではカフェを活用し、シングルマザー対象のわいわいキッチンを「シンシンの会」の一環として3回実施した。

育児支援のネットワーク活動は、「村山地域みんなで子育て応援団」において当法人が会長になって協議会時代から通算9年となった。置賜地区の応援団には、置賜担当スタッフが参画してネットワークでの活動を継続した。台風で被害を受けた福島県本宮市の「ホームスタートもとみや」に、スタッフの有志が募金を届けた(自主事業、地域子育て支援)。

② 保育事業(定款第5条(2))

保育事業は、講座・催し物の臨時託児室運営は51件、うち山形市レディース健診は18件であった。申し込みは81件と30年度より多かったが約4割がキャンセルとなった。これまで通り、衛生管理、主催者との調整、保育者の育成など、保護者が安心して子どもを託すことができるように努めた。平成26年度ごろからチーフ不足、28年ごろから保育者確保が課題となり、保育士や子育て支援者を自団体で育成する方向性を強化してきた結果、新たに2名のチーフを育成した。また、未経験のスタッフ6名に一時保育を各2回経験してもらった(自主事業、保育事業)。

自主事業の会員制の預かり活動「子育てサポート応援団」は、会員186名で活動した。活動件数は29年度321件、平成30年442件だったが、平成31年度は276件と4割弱減少した。利用会員の新規登録が12名あったが、何かあった時のための安心のための登録が多い。平成25年度から受託した山辺・中山ファミリー・サポート・センター事業は、周知広報や、両町の利用者への補助金の効果で、利用件数は、平成27年度40件、28年度216件、29年度300件、30年度は244件と推移してきたが、31年度43件と8割以上減少した。このため、毎月のように両町に出向き周知広報活動に力を入れた(山辺・中山ファミリー・サポート・センター事業)。

「子育てランドあ～べ」の一時預かりは、利用者数が1,585名と30年度に比べ15%ほど減少した。

講座で託児を利用する人の減少、新規登録者数が減少した影響があると思われる（山形市子育て支援施設子育てランド運営事業）。

平成 26 年度から受託した「山形大学小白川キャンパス保育所」は、実績と保護者アンケートなどで評価されたことにより、令和 2 年度から 3 年間の受託が決まった。在籍児は、のびのび、つぼみの合計で、年度始め 16 名から年度末は 25 名と増加、12～1 月は最大で 29 名の子どもが在籍した。自園給食が充実するとともに、造形、科学、英語、音楽、身体表現の活動や学生との関わりなど大学内という特性を生かした保育を行った（山形大学小白川キャンパス保育所運営業務）。

③ 育児や育児中の生活に関する情報収集と提供事業(定款第 5 条(3))

30 年度できなかった法人のホームページ見直しに取り組み、全面的にリニューアルすることができた。子育て中の保護者が求める支援を探しやすくするため、保護者向けには明るいイメージでわかりやすく構築しなおした。併せて団体案内のパンフレット(A4 カラー、8 ページ)500 部、リーフレット(A4 両面、カラー、三つ折り)3000 部を作成した。

「子育てランドあ〜べ」では、情報紙「あべあべ!あ〜べ!」は、毎月 15 日発行、1,800 部を山形市と近郊の公民館、図書館、子育て支援施設等に設置した。また、LINE で原則月 2 回情報提供を計画していたができなかった。

「べにっこひろば」では、情報発信に力を入れ、カレンダー発行の他、山形市のホームページ「すくすくネット」に月 1 回イベントを告知し、ブログを月 3～8 回更新した。また、民間のホームページ「いこーよ」に月 1 回情報を提供した。「べにっこひろばだより」は月 1 回 700～900 部発行、広報やまがたには月 2 回掲載を依頼した。

「子育てでつながる家いろは」は毎月のおたより「いろは」を創刊 50 部発行、Face Book にも掲載し情報を発信した。ホームスタートおきたまのビジター向けに、HV 通信を vol.1～3 発行し郵送した。

マザーズジョブサポート山形、同庄内は、開設したホームページにて情報発信した。

東日本大震災における避難家庭支援では、情報紙「ままカフェお知らせ版」を毎月 439 部発行した。ブログ(日本NPOセンターのCANPANブログ)は法人のホームページをリニューアルした際、過去の活動として見てもらうことに整理した。

④ 女性や育児中の方々の人材育成に関する事業(定款第 5 条(4))

人材育成関連では、育児中の親向けの講座、女性の自立に向けての支援活動、地域の子育て支援力の向上のためのボランティア育成研修会、子育て支援の専門的な研修等を幅広く行った。

一般向けの研修では、親を対象とした「子育てランドあ〜べ」での各種講座、「赤ちゃんと一緒にベビープログラム」(2～5 か月児と母親対象、2 時間×4 回)は、あ〜べで 8 期、いろはで 2 期実施した。将来親となる高校生向けとしては、平成 19 年から「子育てランドあ〜べ」にて継続している“高校生のパパママ体験”を行い、村山管内 5 校 17 名に乳幼児や保護者とのふれあい体験をしてもらった(令和元年度むらやま子育てサポートふれあい体験事業)。あ〜べのパソコン講座は 15 回開催、のべ 164 名受講した。26 年から取り組む「日本情報処理検定」は 4 回実施で 4 名が受験したが、受験者は 30 年度の 5 分の 1 だった。

育児サークル交流研修会では、山形市男女共同参画センターファーストと協働し、育児サークルリーダーの育成、サークル会員支援を図った(再掲)。

女性の自立支援では、『マザーズジョブサポート山形』(平成 26 年から継続、山形テルサ内)、『マザーズジョブサポート庄内』(平成 29 年から継続、酒田市中町庁舎内)は平成 31 年度も継続して企画提案が採択され受託した。

利用状況は、山形では 282 日開設、のべ 1,687 名、一日平均 6.0 名、うち相談は 3.8 名が利用した。周辺工事のため駐車場が使用できず、歩いて 5～10 分かかる代替駐車場となり不便な状況が続き、利用者が伸びなかった。「保育ルームにこここ」は、新規登録者 216 名で平成 26 年開設以来の累計で 2,060 名となり、のべ 240 名一日平均 1.8 名と利用者が減少した。セミナー及び職場見学会は 64 回と年々増加、のべ 358 名が参加した。内容は、自己理解やキャリアの棚卸、配偶者控除と働き方、パソコン講座、保育所についての講座、職場見学会などであった。平成 25 年度より実施している「保育現場復帰講座」は、11 月末から 12 月にかけて 4 日間の講義、1 日の実習の内容で開催した。1 月末株式会社大沼が破産し、従業員、テナントのスタッフの再就職を支援するため、講座・相談会を追加して契約した。

出張相談は寒河江、村山、長井、米沢の各ハローワーク、子育て支援センターにて 37 回行い、セミ

ナー参加は大人 59 名、見守り保育の子ども 43 名だった。出張相談時の個別相談は 43 名、見守り保育の子どもは 38 名であった(マザーズジョブサポート山形就労支援及び託児業務)。

マザーズジョブサポート庄内の利用状況は、241 日開設、のべ 1,204 名、一日平均 4.9 名、うち相談は 3.4 名が利用し、マザーズジョブサポート山形の利用者数に近づいてきた。周知広報の成果と云えよう。「保育ルームきらきら」は、新規登録者 91 名、開設以来の登録者は累計 328 名となり、のべ 210 名、一日平均 1.4 名であった。セミナーは山形に準じた内容で、30 回開催、のべ 224 名が参加し 30 年度の 1.7 倍だった。出張相談は鶴岡、新庄の各ハローワーク、子育て支援センターにて 24 回行い、セミナー参加は大人 88 名、見守り保育の子ども 36 名だった。出張相談時の個別相談は 40 名、見守り保育の子どもは 36 名であった(マザーズジョブサポート庄内就労支援及び託児業務、特定非営利活動法人にこっと共同企業体を組織し受託)。

1 月にハローワークの求人検索システムが新しくなり、インターネットで詳細な情報を自宅で見ることができるようになった。今後、窓口での相談ニーズを検討し、対応内容を考え再構築する必要がある。

ボランティア育成では、「子育て支援者養成講座」を 2 回開催し各地で子育て支援者の育成を図った(山形市 6 月はマザーズジョブサポート山形就労支援及び託児業務、10 月山辺町は山辺町・中山町からの委託で、修了者は山形市 3 名、山辺町・中山町 4 名の合計 7 名であった)。

家庭訪問の子育て支援者を育成する「ホームスタートビジター養成講座」は山形で開催し 8 名修了し 7 名登録した。ビジター数は「ホームスタートやまがた」77 名、「ホームスタートおきたま」15 名となった。

震災関連では、宮城、山形、福島、新潟、埼玉各県より支援者が集まり、杉山恵理子先生を講師に講義とワークショップで研修した。6 月は「災害後の心の回復～グループ支援の効果を学ぶ～」と題して福島市で開催 47 名、12 月は「災害後の心の回復～希望を持ち続けるためのグループ支援～」山形市で開催 46 名が参加した(やまがた・ふくしま子育て支援交流事業)。

家庭的保育者(保育ママ)関連の研修では、23 年度から毎年継続して受託している山形市の家庭的保育者基礎研修は参加者のべ 25 名だった(山形市家庭的保育者基礎研修)。

子育て支援員研修は 29 年度から継続で受託し、地域支援コースの利用者支援(基本型)の研修を 11 月の 2 日間にわたり開催し、3 名が修了した。

特定非営利活動法人日本プレイセンター協会のスーパーバイザー養成講座をスタッフが受講し、5 名がプレイセンター・スーパーバイザーの認定を受けた。

⑤ 調査提言事業(定款第 5 条(5))

ホームスタートについては、ホームスタートジャパンのシステム QISS に基づき全国での統計にデータを提供した。

べにっこひろばでは、来館者対象に随時アンケートを行い、運営に活かした。

山形県受動喫煙防止県民運動推進会議委員に会員が委嘱され、子ども達を受動喫煙から守る立場で参画した。

⑥ 育児支援の様々な事業に対するマネジメント支援及びコンサルティング事業(定款第 5 条(6))

村山地域の子育て NPO と市町村によるネットワーク「村山地域みんなで子育て応援団」では、11 月定例の研修会において分科会を担当し、遊びの分科会、3 歳以上児の幼児教育無償化に関する情報を交換する分科会を開催した。

「べにっこひろば」では、市内外からの視察や研修を 18 件 242 名受け入れた。

⑦ 子育て支援施設の運営事業(定款第 5 条(7))

みはらしの丘「ミュージアムパークはらっぱ館」は、指定管理事業者と 9 年目の委託契約を結び、講座事業や育児サークル「マーブル・チョコレート」などの子育て支援事業を継続して開催した。(蔵王みはらしの丘ミュージアムパークに関わる子育て支援業務)。

「子育てランドあ〜べ」は N-GATE に移転し 3 年目となった。N-GATE は七日町商店街事務所、2 階以上が駐車場で中心市街地活性化の一端を担っている。1 月にセレクトショップ oboco が移転、1 月末に大沼デパートが閉店となり、年明けには新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し 2 月 29 日からおやこ広場が閉鎖となるなど、大きな影響のあるでき事が続いた。

30年度に続いて、保育所に低年齢児から入所を希望する人が増えている現状を受け、赤ちゃん向けの活動を充実させるよう努めた。ベビープログラム「赤ちゃんと一緒に」(通称BP)は8期開催し、のべ442名が参加した。ベビーマッサージは2回開催し参加者は開催38名であった。離乳食は講座、相談会合わせて6回開催111名参加であった。保育士資格取得準備サークル、シンシンの会(シングルマザーの交流会)を継続した。相談事業は、予約しての相談の他、他の事業との連携を継続し、助産師、保健師、臨床心理士、医師がそれぞれ月1回程度おやこ広場に入って相談を受けた。身体測定の日は毎月実施、お誕生会は満1歳以降だけでなく満6か月児も「ハーフバースディ」として対象に加え、より低年齢児に働きかけた。おやこ広場、託児ルームの環境設定を工夫し試行錯誤を重ねた。

平成29年より指定管理者となった「べにっこひろば」は、平成31年度の屋内来館者数は3月を除くと30年度より増加したが、2月29日から年度末まで閉鎖となったため年間では243,494名で、30年度より7%減少した。遊び塾、プレイセンター、木工、造形などを継続し、自主事業の「べにスポ」、各種講座は好評で、相談件数も前年と同等の件数だった。一方、施設や遊具の経年劣化と、利用が多いことによる不具合や破損に対応し、出来る限りの修繕を行った。

置賜地域の「子育てでつながる家いろは」は31年度から長井市の地域子育て支援センターとして受託し運営した。年間166日開館し1,554名が来場した。「助産師さんの日」は12回開催、親子66組147名の利用があった。「赤ちゃんと一緒に～ベビープログラム～」は2期開催、のべ74名が参加した。より早い段階で情報を届けるためマタニティ★デイを開催し、事業の周知に努めた。また、長井市の3か月児健診、パパママ教室で行政と連携しながら周知を進めることができた。

⑧ 子育てに関するイベント事業(定款第5条(8))

『子育て応援団 すこやか2019』(山形放送主催)は12度目の連携事業で、あ～べの出前広場を開催した。山形県男女共同参画センターチェリアのイベント「チェリアフェスティバル」に協力、参画した。「べにっこひろば」では、日常的な親子イベントを担当する他、地域支援に関する業務として様々な団体と連携したイベントに取り組んだ。30年度は29年度の約2倍の参加者数となったが、31年度はさらに地域資源の発掘や育成に力を入れ、季節伝承文化イベント1,107名、地域連携事業1,354名、地域支援事業の育児サークルは270名の参加者であった。特に山形のプロバスケットボールチームが月1回講座を開催したり、地元町内会の協力を得てたくさんのボランティアの方が参加し「だんご木作り」を開催することができた。

⑨ その他会の目的達成に必要な事業(定款第5条(9))

山形大学男女共同参画室との協働は、大学職員や大学院等学生の子育てを支援するため、学童を対象にした託児サポート活動について契約したが利用はなかった(山形大学託児サポート支援業務)。

未就学児のいる子育て家庭への訪問支援「ホームスタート」は山形と置賜のスキームで活動した。県内のスキームは新庄の団体と一緒にビジターの交流会を開催し、24名が参加した。東北・北海道エリア協議会研修交流会参加を継続した。また、ホームスタートジャパンの推進委員として、情報室、スキームサポート、ファンドレイジングに関して活動した。訪問申し込み家庭数は15件、うち山形市は14件、訪問家庭数は11件、うち山形市10件の実績で30年度の約半数だった。産前産後の支援活動として、山形市産後ケア事業業務(ママサポーター)を受託し、のべ26回活動した。自主事業はコーディネーターの初回訪問2件で、活動件数は無かった。(自主事業妊産婦等の産前産後サポート支援、山形市産後ケア事業業務)。

東日本大震災後約9年が経過するなか、避難家庭支援の活動を継続した。

「ままカフェサロン」は子育てランドあ～べを主な会場に16回開催し、のべ21組49名が参加した。うち、みはらしの丘「はらっぱ館」での交流イベントは、芋煮会に24名の参加があった(山形市委託被災者向けままカフェサロン業務)。

米沢市では、「ままカフェサロン」の後継の活動として「スペシャルままカフェ2019親子でキャンプ」、クリスマス会準備会で母親と一緒に活動し、3回のべ34名が参加した(被災児童の交流会等実施事業)。

山形・福島・新潟・宮城各県の支援者がともに交流研修する事業は平成25年より継続実施した。講演会とワークショップの他、子育て支援センター職員向けに各所に出向いての研修会を5回開催し、132名が参加した。福島に帰った人が集うさくらんぼ同窓会は、福島市内で1回開催13名が参加した。福島県内で支援者への状況報告及び意見交換会は2回で親子を含め51名参加した。(やまがたふくしま子育て支援交流事業)。